

東北大学大学院教育学研究科 教職員対象 ハラスメント研修会 「つくろう、ハラスメントのないキャンパス 2012」

実施報告書

大学院教育学研究科ハラスメント防止対策委員会

本郷 一夫 (委員長)

加藤 道代 (副委員長)

上埜 高志 (委員)

柴山 直 (委員)

安保 英勇 (委員)

鳥澤 誠 (事務長)

2012 年 7 月

I 東北大学大学院教育学研究科ハラスメント研修会 「つくろう、ハラスメントのないキャンパス 2012」実施内容

この研修会は大学院教育学研究科ハラスメント防止対策委員会が主催し、本研究科の教職員を対象に行われた。

実施内容等は以下のとおりであった。

日 時：2012 年 7 月 18 日 (水) 17:15-18:15

場 所：文科系総合研究棟 11 階大会議室

講 師：東京工業大学カウンセリングセンター 道又紀子教授

内 容：アカデミック・ハラスメントの理解と対応－東工大の様々な事例から伝えたいこと－

参 加 者：教員・事務職員 23 名 (アンケート回答者数)

主 催：教育学研究科ハラスメント防止対策委員会

II 内容の骨子

ハラスメントについて

・東工大では、ハラスメントを「セクシュアル・ハラスメント」「アカデミック・ハラスメント」「その他不適切な言動により、大学構内の内外を問わず精神的な面を含め就労、教育又は修学に関連して一定の不利益を生じさせる行為」として規定している。これは、ハラスメントは時代により変化するため、「セクシュアル・ハラスメント」「アカデミック・ハラスメント」のいずれにも属さないハラスメント（例えば、モラルハラスメント、パワーハラスメントのようなもの）が想定されるからである。

・東工大では、学勢（がくせい）調査を実施しており、ハラスメント被害について尋ねる設問も設定されている。これによれば、アカデミック・ハラスメントは、「かつてあった」と「現在受けている」を合わせると5.2%である。学部生<修士課程<博士課程の順、すなわち、所属する研究室が決定し学年が進むほど、ハラスメントの被害が多くなる。

・東工大は90%以上が男子学生のため、女子学生へのハラスメントは表面上少なく見える。しかし全体の女子学生数からみれば、割合としては多いと考えられる。

アカデミック・ハラスメントの難しさ

- ・観念的には理解できても、自分が関与すると理解が難しくなる。
- ・今行っていることが不適切になっていることが理解しづらい。
- ・立場が絡み合うと、有効な動きができない。

アカデミック・ハラスメント理解の4つのクリティカル・ポイント

- ・時間（例：長時間の研究活動、長時間叱ったりする等）、言葉（例：暴言、メール）、研究権（例：現場で貢献した若手の著者順等）、男女同権（例：出張先等、李下に冠を正さず）の視点からハラスメントを予防する。

事例

- ・不登校になった事例
- ・直接指導しているスタッフの言動が不適切であり、訴えを起こした事例
- ・インターネットを使ったハラスメントに対応が遅れたケース

指導上のトラブルを解決するために

- ・誰にでもなりうるという認識が必要である。
- ・自分の所属している部署の問題は自分では見えない。
- ・解決方法としては、被害者の苦痛軽減に配慮していけば間違いない。
- ・柔軟な指導には、専攻全体の協力が必要となる。
- ・上の立つ人の動きが大事
- ・教員側は指導と思っても、学生はハラスメントととらえることがあるという「ミスマッチ」という視点が大事である。

III アンケート調査結果のまとめ

1 アンケートの内容

設問Ⅰ 本日の研修についていかがいます。あなたの考えに近い数字を○で囲んで下さい。

[1] 本日の研修内容は、役に立ちそうですか。

(たいへん役に立ちそう 6 から、全然役に立たなそう 1 までの6段階評定)

[2] 本日の研修企画は、意義があると思いますか。

(たいへん意義があった 6 ～ 全然意義がなかった 1)

[3] 本日のような研修企画を、本学部・研究科が今後も継続することについてどう思いますか。

(ぜひ継続すべき 6 ～ まったく継続の必要性はない 1)

[4] 本日のハラスメント研修に関して意見や感想がありましたらお書きください。

(自由記述)

設問Ⅱ 今後のハラスメント防止対策に期待することなど、意見や感想がありましたらご記入ください。(自由記述)

2 アンケートへの回答の集計

2-1 回答の概況

・回答者数 23 名

2-2 設問Ⅰの [1] ～ [3] の各項目についての評定値の分布は Table1 のとおりであった。

Table 1 設問Ⅰの項目別評定値の分布 —数値は人数(回答者中に占める百分率)—

評価値項目	6	5	4	3	2以下	計
1 役に立つ(有用性)	8 (34.8)	12 (52.2)	2 (8.7)	1 (4.3)	0 (0.0)	23 (100)
2 意義がある(意義)	6 (26.1)	13 (56.5)	3 (13.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	23 (100)
3 継続すべき(必要性)	8 (34.8)	9 (39.1)	5 (21.7)	1 (4.3)	0 (0.0)	23 (100)

2-3 設問Ⅰの 4 に対する回答(自由記述;16 件)

A 参考になった、とするもの (12 件)

- ・ かすかな傾向の後ろに実は大きな問題が潜んでいるというのはまさにその通りと思います。
- ・ 「学生から学生又教職員へ」という定義も興味を持ちました。
- ・ 教師向けパンフ、柔らかくわかり易い！
- ・ 道又先生が柔軟に対応されていることに感心しました。
- ・ 被害者を装う加害者の巧妙さにも舌を巻きました。
- ・ 全く別世界の出来事のようにでした。その分、十分に気を付けようと思いました。

- ・ セクハラはさておき、アカハラはたいへん慎重である必要があると常に感じているが、今回の研修でもう一度考える機会を与えられ感謝しております。
- ・ 学外の先生の話がきけて、大変意義深いものでした。
- ・ 被害者の苦痛軽減が重要、なるほどと思います。
- ・ 自分の所属部署の問題は見えない、というのは興味深い。
- ・ 具体事例が大変参考になりました。身近に起こった際の対応が大変ということが納得できた。
- ・ ありがとうございました。

B 講話についての要望・意見等 (4 件)

- ・ ハラスメント行為そのものの態様についてもっと具体的に教えていただきたかった
- ・ もう少し時間があるとよかった。
- ・ 毎年ハラスメントの FD を受けて、言動にはかなり気を使っています。ただどんどん学生－教員間の距離が離れていっている気がします。対人関係・社会全体の問題だと思いますが、これからどうなっていくんだろう？と思っています。
- ・ 以前の学生に比較し、精神的に弱い面もありますが、言葉の中に少しでも思いやりのある注意、言葉等があればハラスメントを軽減できるのかと思いますが、女子学生の多さ及び男子学生の精神的弱さが増加していることに危惧を覚えます。また多様な人間関係の中でどういう間隔を持つことができるか、ひじょうに難しいと思います。

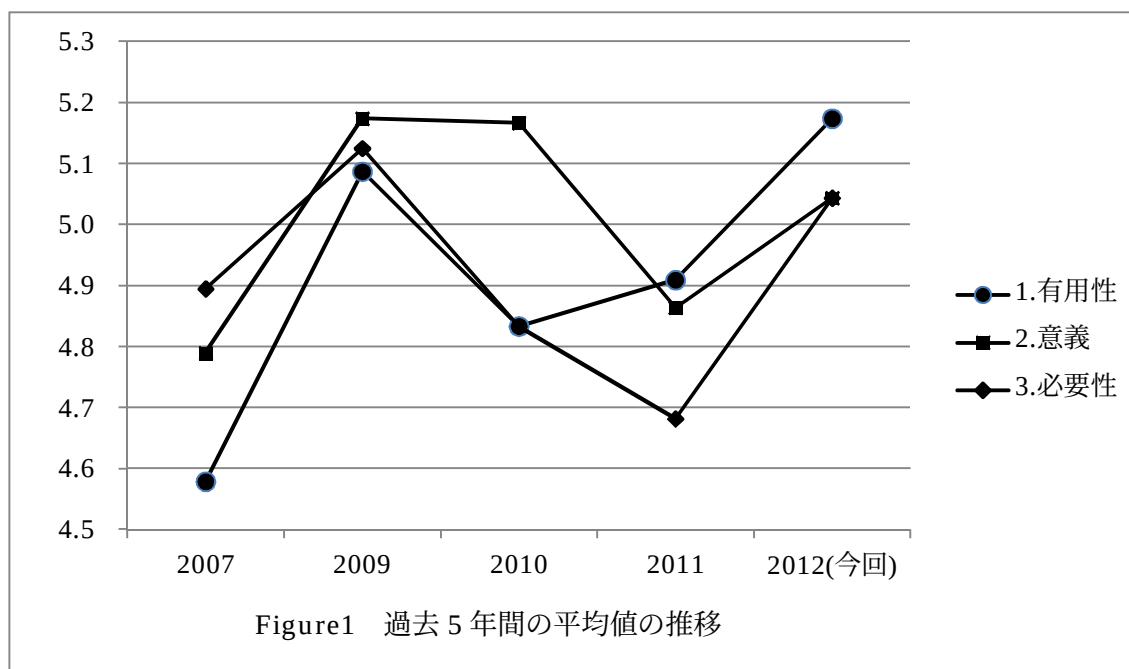
2-4 設問Ⅱに対する回答 (自由記述;3 件)

- ・ 微妙なことでもありその辺りを更に教えてほしい。
- ・ ハラスメントに対応できる精神的強さのほかに、言葉が暴力の力を持っていることについて、教職員、学生共自覚する様、劇団の人とかにデモをしてもらい、学生、教職員に見てもらうことも必要かと思います。
- ・ 学内の方の話もいいですが、学外の方の話も大変参考になりました。

3 まとめ

3-1 今回の FD 研修についての評価

全体としては、3つの設問(有用性・意義・継続の必要性)ともに、95%以上が肯定的評価(6段階で4以上の分布)となりおおむね好評であった。



また過去5年間の推移を平均値でみると(Figure1)、近年の低下傾向に歯止めがかかり、上昇に転じたことが見て取れる。この理由としては、講話の中で紹介された事例が非常に具体的であり、ハラスメント対応のポイントが臨場感を持って伝わった点、また講師が学外講師に変更となり、新たな情報などを得ることができたという点などが考えられる。

3-2 今後のFD研修のあり方についての意見

今回のFDに対する評価は全体として肯定的なものであったが、更に詳細に具体的に、また時間的余裕を持った企画を希望する意見が散見された。これらの点は従来から指摘されている点でもあり、一層の改善を図っていきたい。